

第二十三章は古来よりの家伝の売薬の一覧である。第二十四章は四百二十年間の甲州医事年表である。附録一は医師の伝記碑銘集である。

あとがきでは編者樋泉明氏により村松右仲に始まる古医家村松一族の歴史と学佑の略伝、本書出版の経緯が述べられる。

編者も述べているが、本書には筆者の知る範囲でも人名等の誤りが少なからず見受けられ、引用には注意が必要である。

だがこれは関係者子孫からの聞き取りと筆写が中心の研究方法の為であり、本書の価値を少しも減じるものではない。

本書は、日本全国の最新医学の影響を受けながら発展してきた甲斐の医学の歴史の全体像を初めて明らかにした。

今後の甲斐の医学史の研究には、本書と編纂資料の「山梨県志医事衛生資料」の徹底的な検討が不可欠であろう。

(荒木 幹雄)

〔甲斐国医史刊行会、東京都渋谷区本町六―十五―十五 村松英世方、電話〇三―三三七六―九八一〇、平成十四年十一月一日、B六判、六二六頁、七〇〇〇円〕

編集後記

世は説明責任が求められる時代となっている。それは学問の世界においても同様である。自分のしている研究を世間に対して説明し、その意義を納得してもらわなければならない。それができなければ道楽とみなされ、研究費も研究の場所も失うことになる。

顧みて医史学はどうであろうか。ご承知のように、八〇ある医科大学・医学部のなかで医史学の講座を置いているところは皆無、研究室が一つあるのみである。学会は創立百年を誇っているが、それに見合う人材養成の場はない。これは何を意味するのか。説明責任を果たして来なかった、ということに尽きよう。大学設置者の心を動かすに足るだけの魅力が医史学になかったということである。

現在、厚生労働省が推し進めている国民医療費抑制にともなう諸施策は、国民の安心のシステムを大きく脅かすものとなっているが、こうした政策課題に対して、あるいは少子化対策としての生殖補助技術の適用に対して、あるいは移植医療や遺伝子解析における倫理的な問題に対して、医史学の立場からコミットすることができれば、医史学の認知度は上がり若い研究者の参入も期待できよう。元氣の出る論文がほしい。

(新村 拓)